
気になるあの人

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になるあの人

【Nコード】

N5437T

【作者名】

空

【あらすじ】

季節は初秋。私には、最近気になる人がいる。

どうしても目で追ってしまう、金髪のあの人。

作者、初投稿作品です。

5/27、5/31、修正しました。会話とかいろいろと増えています。

（前書き）

作者、初投稿作品なので、拙い所がいろいろとあるとおもいますが、生暖かい目で見てくださいるとうれしいです。

5 / 2 7、内容を書き加えて会話を増やしてみたりしました。

5 / 3 1、矛盾を修正。

季節は初秋。

教室には夏休み明けの独特な倦怠感がなんとなく漂っている。

窓際の席には午後のやさしい日差しが教室に漂う倦怠感や昼食後の満腹感と相まって眠気を促し、少し開いた窓から流れてくる風も心地よい。

うつらうつらとしながら、古典の教科書の朗読を聞くが、年配の男性教師の落ち着いた声がさらに眠気を促す。

襲ってくる眠気と戦いながら、ふと前を見ると、2つ前の席で金色の髪が日差しを浴びてキラキラと輝いているように見える。

最近、あの人をよく目で追うようになった。

この高校は校則が緩い。勉強と部活動や委員会活動をきちんとしていればあまり口を出されない。

そういう校風があつてか、髪を染めていたり、化粧や制服改造をしている人が結構多い。

…やり過ぎるとさすがに注意されるけど（やり過ぎて学校の名物になっていく人もいる）。

だから金髪は珍しくはない。

何故目で追ってしまうのか不思議に思っている。

うつらうつらとしながら考える。

たしか初めてあの人見たのは春の委員会決めの時だったと思う。

うちの高校は部活に所属していない生徒は強制的に委員会に所属することになっているから、私は1年の時から所属している図書委員会に立候補した。

そのとき同じ図書委員会に立候補したのがあの人。

1年の時はクラスが違ったのか見たことのない顔だった。

私が図書委員に立候補したのはさくらやナツに本の虫と言われるぐらい本が好きだから。

だけどそれまであの人のことを図書室でも図書委員会活動の時も見たことがなかったから、図書委員になるのはサボリ目的かと思って思った。

図書委員は担当になった曜日以外、あまり活動することはない。

体育祭委員会や文化祭委員会みたいに図書委員会主催のイベントもとくには無いから、他の委員会よりも比較的に楽だ。

あるとしたら奇数月にある新刊の入荷会議ぐらい。

だから、楽をするために、つまりはサボリ目的で図書委員になった人が1年の時にもいた。

それにあの人の髪が金髪で耳にピアスをつけていて目つきが鋭くって、ちよつとこわく見えたのもあったけど。

今年初めての委員会は1年の時と同じで顔合わせも兼ねた本の整

理だった。

1年の時に図書委員だった友達もいてちょっと安心した。

顔合わせも終わり本の整理をはじめると、本の整理をしないで話してばかり人がいた。

1年の時と同じで、今話しをしていて本の整理をしない人達はだいたいサボり目的で図書委員になった人たちだ。

その人達を見たら本好きとして少し悲しくなった。

それでやっぱりあの人もサボり目的なのかと思ってあの人を見ると、真面目に本の整理をしていて驚いた。

話しかけられて少し話すこともあったけど、手を休めることはなかった。

たまに本の整理の途中で小説を読み始めてしまって、手が止まってしまう時もあったからもしかしたら本が好きなのかもしれないと思つてうれしくなった。

そう、あの時はとても驚いた。

古典の朗読はまだゆつたりと続いている。

残り時間を考えると今日の古典はたぶん朗読で終わるだろう。

外から聞こえる楽しいげな声に校庭を見ると、どこかのクラスが体育の授業をしている。

ジャージが新しく見えるから1年生だろうか？

すぐ下に校庭はあるのに声は遠くにいるみたいに聞こえてくる。

その声を羨ましく思いながら再度あの時に思いをはせる。

改めて思うと半年もたっていないのもうずいぶん昔の出来事に思えた。

静寂とした図書室にはあの人の本をめくる音が響いていて、

窓には夕陽の淡い朱色をおびた光が射し込んでいた。部活動に勤いそしむ生徒達の掛け声が遠くから聞こえた。

その後、本の整理が終わって解散になった。

だけど一般生の完全下校時刻までまだ時間があつたから図書室に残ることにした。

そうしたら、あの人も残っていてまた驚いた。

本の整理中に気になった本があつたらしい。

図書館にはあの人と私しか残っていないくつて、私と同じぐらい本が好きなのもしれないと思った。

だからあの時、あの人に話しかけてみたんだ。

…ちよつと怖かつたけど。

「…本読むの好きなの？」

「……ああ。」

「…好きな作者さんとかいる？」

「…芥川龍之介。」

無視されたらどうしようと思ったけど、答えてくれてほつとした。

芥川龍之介か…。

羅生門とか地獄変ぐらいしか読んだことないな。

「…渋いね。」

「よく言われる。」

「私は赤川次郎の三毛猫ホームズが好き。」

…あと***っていうファンタジーもよく読むな。」

あれは面白い。

読み応えがあつてお気に入りの1つだ。

「…うちの姉貴がシリーズで持つてる。ファンタジー好きなのか？」
「うん、好き。推理小説とかも好きだけど。」

って表紙の絵は女の子受けする可愛い絵だけど、内容は結構詰まっついていて面白いよ。」

話してみると本の趣味が合って、その後もつらつらと好きな本の話をした。

あの人の話を聞いていると、意外といろんなジャンルの本を読むことがわかった。

私が読まないジャンルの話もあって面白かった。

話の中には私の好きな本もあって、嬉しくなったりもした。

あまり口数の多い人ではなかったけど、私も人と話すのはあまり得意ではないし、いやな感じはしなかった。

むしろ男子と話す事も本について語れる人もほとんどなかったから、ドキドキしていた。

そのあとは別々の曜日に担当が決まって、教室では話す事はなかったけど、たまに図書室で本について話したりした。

気になり始めたのはこの頃からだ。

目で追い始めたのは夏休みに入る前だったと思う。

制服が夏服に変わってYシャツの白が眩しくて、蝉がミンミン鳴き始めた頃。

空がとても青くて、遠くで入道雲が育っているのが見えた。

提出物を出しに職員室に行ったら担任にノートを運ぶのを頼まれてしまった。

職員室は涼しくって快適だった。…ちょっとずるいと思う。結構量があつて、えっちらおっちら運んでいたら、つまづいて廊下にノートをばらまいてしまった。

周りにいた子たちが拾い集めるのを手伝ってくれたけど、一番最初に拾い始めてくれたのがあの人だった。

落としてしまったノートを全部回収して一息ついたら、

「大丈夫か？」

と、話しかけられてちよつとビクツとしてしまった。

声のほうを見るとあの人立っていて、驚いた。

拾ってくれたのもちよつと驚いたけど、図書室以外で話しかけられた事にも驚いた。

もしかしたら図書室以外で話すのは初めてだったかもしれない。

「大丈夫。拾ってくれてありがとう。」

「別に。」

そしたら私が腕に抱えていたノートをひょいっと取って、そのまま教室まで運んでくれた。

…また落としそうにでも見えたのだろうか。

見ると私が両手で抱えないと持てないノートを軽々と片手で持っていて、ちよつと悔しかった。

隣に並ぶと思っていたより身長が高くってちよつとドキツとした。頭一個分ぐらい違う。

私は身長が低めだから、またちよつと悔しく思った。

態度はそつけなかつたけど、意外と紳士なんだなって思ったのを覚えている。

夏休みになって、さくらの部活が休みでナツの漫画の原稿が終わって投稿したから遊ぼうという話になって2人と遊ぶことになった。けれど、外は炎天下で遊びに出る気分にはなれなかったからさくらの家で遊ぶことになった。

さくらの家になった理由は簡単。

ナツの家は今、ナツの部屋が漫画の原稿を書いていたから散らかっているから無理で、私の家は弟の友達遊びに来ているからだ。

ちなみに、二人とは中学からの友達だ。

親友といってもいいかもしれないくらい付き合いが長い。

同じ高校になって1年の時は同じクラスだったけど、2年になってからはナツだけが離れてしまった。

とはいっても隣のクラスだからお昼とかは3人で食べるけど。

そのときにさくらとナツになんとなくあの人の事を話してみた。そしたらさくらには「気になるんだったら本以外のことも話してみれば？映画の話とか。」とポツキー片手に言われ、ナツは手帳を持ちながら「絶対に恋だねそれ！青春だねっ！今度の漫画のネタにするから詳しく聞かせてっ！！」と言ってさくらに頭を叩かれていた。

…ナツの発言はいつも通りだけど、だんだんさくらのツッコミが容赦なくなってきたように感じるのは気のせいだろうか？

眠気と戦いながらキラキラとしている後ろ姿をぼんやりと見つめる。

あの”ノートばらまき事件（私命名）”のあと図書室以外でも話すようになった。

やっぱり本の話ばかりだけど。

夏休みのあの日、ナツに恋をしていると言われたときはおもわず否定してしまった。

…だけど、

あの別に珍しくもない金髪がキラキラと綺麗に輝いて見えるのはナツが言っていた通り、恋をしているからだろうか。

本を見ていた横顔が、ノートを運んでくれた時の姿が、かつこよかったと思うのは、恋をしているからなのか。

そんなことを考えていると眠気が飛んで、顔に熱が集まってきた。これ絶対顔赤くなってるって！

うわっ、しかもなんかドキドキしてきたんですけど!？

……認めます。私、佐山美里は菅原悠也さんのことが好き、みたいです。

前を見ると必然的にあの人が視界に入る。

金髪がキラキラと眩しい。

なんだか急に恥ずかしくなってあの人から目を逸らせる。

… 自覚したらあの人のこと見るの恥ずかしくなっただけですけど!?

その後、^{あと}授業が終わっても動かない私を心配したさくらに肩を叩かれるまで、赤い顔のまま固まっていたらしい。

(後書き)

5 / 27、送っていただいた感想になるほど、と思いちよっとい
るいと書き加えてみました。

5 / 31、矛盾を見つけたので修正しました。

もしかしたら、友人や菅原悠也目線で話を書くかもしれないです。
菅原悠也目線の話を書くときは実は両思いでした。話が好きなので、
そういう話になるかも…。

作中に出てくる***はいい本が思いつかなかったので。
主人公の身長は平均よりも低めです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5437t/>

気になるあの人

2011年6月5日17時55分発行